

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】(2ユニット共通/1階、2階ユニット)

事業所番号	2772401457		
法人名	有限会社 つくし野		
事業所名	グループホーム つくし野		
所在地	大阪府枚方市三矢町8番9号		
自己評価作成日	令和4年9月1日	評価結果市町村受理日	令和4年10月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ ナルク福祉調査センター
所在地	大阪市中央区常盤町2-1-8 FGビル大阪 4階
訪問調査日	令和4年9月29日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

理念に「老いても豊かな人生を求め」とあるように、認知症であっても地域社会に出掛け、楽しみが持てるように個別の対応に力を入れている。毎日の散歩や地域の行事・外食・喫茶店でティータイム・買い物・お誕生日にはご本人様のご希望通りの過ごし方で「自分らしさを大切に」する支援を行い、「共に寄り添い支え合う安らぎのある家」とあるように、家事全般を職員と利用者様と共同で行うことにより、利用者様同士お互いを支えあって生活されている笑顔の絶えないホームである。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は設立21年目を迎える歴史と実績のあるグループホームである。後に出来た法人関連の2つのグループホームと理念を共有しながら研修等で連携している。開設当初から続けている毎日の散歩は季節を問わず、コロナ禍の中でも継続している。食事も重要視し専門の職員が調理し、美味しく温かい食事を提供している。食材の買い物は利用者や近くのパン屋さんなどに出かけ地域との交流も途絶えていない。「自分らしさを大切に…」の理念をもとに個別の対応に力を入れ本人本位の暮らしを提供している。利用者のお昼寝タイムや職員とゆったり過ごす時間を確保し、家庭的な雰囲気の中、穏やかに楽しく過ごしている。家族へは手厚くこまめな電話連絡の他、家族会(今年は中止、年間の運営報告書)や年4回の新聞発行、毎月のお便りなどが好評で大きな信頼を得ている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

【本評価結果は、2ユニット総合の外部評価結果である】

自己評価および外部評価結果 【2ユニット総合外部評価結果】

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「つくし野は住み慣れたこの地域で老いても豊かな人生を求め、自分らしさを大切に共に寄り添い支え合う安らぎのある家」を理念に上げ、パーソンセンタード・ケアを実践している。	開設時に職員と共に作り上げた理念(2つのグループホームと共有)を大切に、パンフレットやホームページ・各フロアに掲示し周知を図っている。職員は毎月理念を暗唱し年一回振り返りを行っている。ユニット独自で理念をもとに「一日一回笑顔で過ごしていく」などのキャッチフレーズを掲げ理念の浸透・実践に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	利用者様と毎朝の散歩時にご近所の方と挨拶などのご近所との交流はあるが、以前のような近所への買い物などはコロナの感染が拡大している為、行えていない。	運営推進会議に自治会長の出席があり、老人会に加入して地域の情報を得ている。交流は殆ど自粛しているが、食材の購入は近所のスーパーなどに通い、朝食のパンは利用者で馴染みの店に行っている。コロナ収束後はすぐ前の旧街道沿いでのイベント(五六市)に参加するなど地域との交流を復活させたいとしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域で認知症介護を行っている家族の方から時々相談を受けることもあり、また運営推進会議で地域で役立てることはないかを考え話し合うこともある。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	入居者様の状態の変化・入退居・行事・ヒヤリハット、事故報告の報告等を行っている。又施設側の悩み・問題点を議題としてあげ話し合いサービス向上に努めている。議事録をご家族に配布し、事業所運営のご理解とご協力を得ている。	コロナ禍により前年度の実施状況は構成メンバー参加の実質開催が3回書面報告が3回である。メンバーは地域包括支援センター職員・自治会長・家族代表と固定化している。前回の外部評価の改善項目に取り上げた「・運営状況報告にヒヤリハットや事故報告を入れる。・議事録を全家族に配付する。」に早速取り組み実践している。	様々な立場の参加者から意見や助言を得ることで事業所の課題が見つかり支援の質向上にも繋がる。構成メンバーの固定化による会議のマンネリ化を防ぐ為には地域住民・民生委員や知見者・家族などに広く参加求めるなどメンバーの拡充を期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村の法人指導担当者に質問・相談等をもちかけサービスの質の向上に努めている。	日頃の報告・相談・コロナ感染対策は電話やメールで市の窓口(福祉指導監査課)と連絡を取り合っている。コロナピーク時の相談は保健所から頻りに指示を貰った。地域包括支援センター主催の研修やグループホーム連絡協議会の会議はリモートで開催され、2月に1度参加し情報交換を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束についての研修を年に数回行い知識を深め、又その知識が活かせるよう努めている。新入社員が入社した時もきちんと研修を行っている。	「身体拘束等の適正化のための指針」を整備し委員会を三月毎に開催、新人研修・年2回以上の研修も適切に行い、身体拘束の弊害の理解に努めている。現在は該当者はいないが、看取りの一時期に安全確保の目的で介護衣(つなぎ服)を利用した例がある。家族に説明し同意を得て経過記録も残している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止についての研修を年に数回行い知識を深めている。新入社員が入社した時もきちんと研修を行っている。また介護職員が介護に対してストレスを溜めないよう管理者が職員(個別)の話を傾聴することや話し合いの場を設けている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ミーティング時に勉強する機会を設けている。又必要な入居者には支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分に時間をとり、ご家族様と契約書の読み合わせを行い、わかりにくい部分は補足説明等を行っている。ご家族様から質問があればその都度説明を行い、納得を得た上で手続きを行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会や運営推進会議で、意見・不満・苦情を言える雰囲気や機会を設けている。又、契約書に当事業所以外の相談・苦情窓口(第三者機関)を記載し、契約の際に案内している。	年1回の家族会は現在休止中の為1年分の詳しい運営状況をまとめ郵送している。「ゆった〜り新聞」(年3回発行)各人の写真と日常の様子を知らせる「毎月のお便り」や電話などでこまめに情報を提供している。コロナ禍中、不安がる家族の要望に応え、主治医から直接病状を聞けるように手配するなど、家族を支えた事例がある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のミーティング時や管理者と職員の個別の話し合いの時に聞いている。又、入居者様のお昼寝の時間を利用して、管理者・職員で困っていること・改善点等を話し合う場として利用している。	職員の委員・担当制(居室や行事など)は特に決めていないが、月ごとの行事の企画に携わる過程で介護方法や業務内容の問題提起が増えており支援現場での改善に反映している。職員の面接は管理者が年1回行うが、毎日機会あるごとに話し合いの場を設けている	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は管理者や職員に個別で話し合う時間を定期的に設け職員の思い、不満等を聞くようにしている。質問があれば、それに対して理解するまで説明し、やりがいを持って働けるよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者が職員の能力に応じて適宜指導し、通常の業務の中で配置やシフトの組み合わせによって他職員から学べるよう工夫し内外の研修も受けられるよう配慮している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	現在はコロナ禍でインターネットでのズームを活用して、地域包括の研修や地域グループホーム交流会には管理者・ケアマネジャーが参加しサービスの質の向上に努めている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居に至るまでにご本人様の話を十分に聞けるよう在宅の方には自宅、入院中の方には病院、他施設入居中の方には施設へ出向く機会を少なくとも1回、必要であれば3~4回出向く機会を儲けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族様が今まで介護をされ、現在の大変さや将来の不安をよく理解し、親身になって相談に応じている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	過去に昼間だけ体験でホームで過ごして頂き、他の入居者の方とは生活リズム・質が合わないことを知って頂き、在宅の継続を納得して頂いたことがある。(若年性アルツハイマーの男性ケース)		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者様が今まで歩んで来られた人生の中での色々な知識を、職員が利用者様から学ぶ関係を築いている。(料理・踊り・歴史・手芸・生活の知恵等)		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者様の現状を本音でご家族様と話し合い施設側とご家族様が信頼関係を持って協力しあい、利用者様を支えていけるよう努力している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご家族様や知人の方にはコロナの大阪府の規制が緩和されている時は別室で時間を定めて面会して頂いたり、感染拡大している時は、窓越しの面会等を行っている。	大阪府の感染拡大規制下や緩和期にあわせ「リモート・網戸・窓越し(会話は携帯電話)・短時間の個室で」と3通りの面会方法を家族(知人も可)に行っている。馴染みのパン屋での朝食用の買い物は継続している。携帯電話・電話・年賀状・手紙のやり取りなど馴染みの関係継続のための支援を続けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	「共に寄り添い支え合う」と理念にも掲げ、家事全般を職員と利用者で行う中でお互いに仲良く支え合えるよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	グループホーム→病院→他施設へ行かれた方やその他のご家族様と今でも相談をうけアドバイスをを行っている。施設の行事の際には積極的にお誘いしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の生活の中での思い要望を聞くことや、行動の把握や又個別対応にて利用者様と外出をした際に、普段聞けないような希望・思いを引き出す工夫を行っている。	意向の把握困難な2名には、本人の表情・仕草・家族からの情報により把握している。得た情報は業務日報などに記録・共有し、好きな音楽や食事などを本人本位に工夫して提供している。独居を経て入居した利用者の事例では、笑顔や会話が増え「ここに入れて嬉しい」の言葉があるなど、めざましい改善が見られ職員は手応えを感じている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族様やご本人様からモニタリングをしっかりと行い、パーソンセンタード・ケアに役立てている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	規則正しい生活の中で個々の能力に応じた過ごし方をして頂けるよう支援している。又、料理・掃除・洗濯など生活リハビリの中でもさらに何か出来ないかを考え、ミーティングで話し合いを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ミーティング時やご家族様の来訪時など、また随時必要な時に関係者と話し合い、意見を聞きケアプランを作成している。	ケアプランは短期目標半年・長期目標1年とし職員の介護記録や意見により毎月モニタリングを行っている。担当者会議ではケアマネージャーが医師・看護師・職員・家族・本人からの情報を集約し計画を作成している。状態変化時や終末期には、速やかに対応し現状に即した内容に変更している。家族には電話や郵送で相談し了解を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録・日報をしっかりと記録し、それらを全職員が目を通して情報を共有し、日々の介護に反映出来るように努力している。利用者様のお昼寝の時間を職員同士の情報交換の場とし活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	御家族様やご本人のニーズに対応すべく、御家族様と連絡を取り合い、なるべくご家族様、ご本人様の希望に添えられるよう努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で以前のように交流が出来ていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所の協力医療機関かかりつけ医の説明を行い、ご本人様のそれまでの馴染みの医療機関とどちらにされるかを選んで頂いている。必要に応じて馴染みの専門医や必要な診療科目の受診も行っている。	利用者・家族の希望するかかりつけ医となっているが、協力医療機関の内科(月2回)歯科(月1回)の訪問診療を全員が受けている。脳外科・精神科の受診は家族が同行し、受診内容を聞きとって往診記録に記入している。家族同行困難時は事業所が対応し、週1回訪問看護師の健康チェックがあり適切な医療・健康管理体制となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	提携を結んでいる訪問看護ステーションから訪問看護にて対応している。又、訪問看護の際に利用者様の状態や変化等を報告・相談している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	H20・7月より提携医を変更。急性期の受け入れ病院など提携医からの紹介で搬送されている。入院にて認知症の進行ADL低下を懸念し入院先の医師・提携医と相談しながら早期退院に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	各家族様に終末期の希望を聞き、家族会で事業所としての看取りの指針を説明し指針を共有している。H20・7より提携医を変更し濃密な医療支援が行えるよう体制を改善し取り組んでいる。出来ること、出来ないことをご家族様に説明をしっかりと行っている。	入居時に「看取りの指針」文書で事業所の取り組み体制と方針を説明し、同意書を交わしている。身体状態変化時は事業所から重度化・終末期対応を説明し、要望があれば主治医からも説明している。年1回の看取り対応の研修実施と共に、個々に即した終末期ケアを全体で検討して取り組んでいる。今年度は2名の看取り経験がある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に外部より指導してくれる方を招き、応急処置・緊急時の対応などの訓練を行っている。又、実際救急対応した場合は他職員に詳しく説明する機会を設け迅速に対応できるよう努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	1年に2回の防災訓練、1年に1回の水害を想定した訓練を行っている。もっと地域の方に参加して頂けるよう、今後も努力していく。	日中・夜間想定と水害対策の訓練を年3回実施している。5年間保存の保存水・保存食(アルファ米・缶詰)や携帯ラジオ・懐中電灯・薬剤・衛生用品・毛布等の備蓄品を準備し、緊急マニュアル・連絡網を各フロアに整えている。地域性と地域住民の高齢化で近隣の協力体制が構築されていない。BCP対策は現在策定中である。	地域住民の協力が得にくい環境下にあるが、地域の民生委員の呼びかけや近隣の福祉関連施設と連携を図り、非常時における協力体制の確立を目指す事に期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	自己評価を定期的に行い、自己チェックする機会を設けいつまでも基本を忘れないよう気をつけている。	接遇研修や年1回の自己評価でケアの能力の振り返りとコミュニケーション力の向上を図り、利用者のニーズに込えている。過剰な丁寧語は控えると共に、不適切な言葉かけや言動の際には管理者が個別で注意を促している。入浴介助は同性介助で行い、排泄・入浴時のドアの開閉に配慮し、入室時には声かけとノックを心掛けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	要望ノートを作成し、普段会話の中から要望を引き出すよう支援している。個別での外出時普段聞けないような願望を引き出す工夫をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事時間は決まっているが、他のことは本人の希望を大切に、柔軟な対応を行っている。。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	移動美容院を利用しているが、特に要望のある方には、個別で他の美容院にお連れしたり、ご家族様に散髪して頂いたりご本人様の希望をお聞きしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	家事全般は毎日職員・利用者様が共同で行うよう支援している。皆さん順番に好みの物をお聞きしそれを皆さんと準備・調理・片付けを行っている。	朝食は夜勤担当職員が作り、食材はスーパーや近くの八百屋で調達し、昼・夜食は管理栄養士資格保有の職員の献立で、調理専門職員が作っている。イベント食(タコ焼き・餃子・ちらし寿司・フランクフルト)やおやつレクリエーション(手作りケーキ・プリン・ぜんざい)を楽しみ、利用者はできる範囲の準備や後片付けに参加している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎食カロリー計算を行いバランスの良い食事を提供している。又、毎日食事量・水運量を記録しその人に合った支援をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯科医の指示の元、適切な口腔ケアを毎日行っている。必要な方には介助している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	尿量・便量・状態・時間を全て記録し、ある程度のパターンを職員が把握しトイレ誘導、声かけをおこない失禁を減らしている。過剰介護はしないよう出来ることはしていただくよう努めている。	殆どの利用者が尿意・便意を表せて、排泄記録やパターンを把握して17人中15人が日中トイレで排泄を行っている。夜間時は2時間毎の見回り時に様子を見ながら個々のリズム・習慣に合わせて声かけ誘導し、睡眠を重視している。事業所に入居後排便が改善されたり、排泄の失敗が少なくなった人もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	野菜中心の食事・適切な運動を日々の日課とし対応している。自然排便が困難な方には主治医の指示の便薬により定期的な排便が行えるよう支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一応入浴の日程表を作っているが、体調やご本人様の希望に沿って随時変更、調整をしている。	週2回の午後を入浴の基本とし、浴槽は家庭用浴槽で湯は溢れさせて循環している。ゆず湯(事業所の庭にあるゆずを利用)や入浴剤を適時使用して変化を楽しんでいる。入浴拒否の人には声掛けの工夫や職員交代で対応しているが、拒否が強い時は清拭(自分で出来る)に切り替え、清潔保持に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜の安眠の妨げにならない程度の昼寝や傾眠、体調不良時にはしっかり休息が取れるように気をつけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ファイルに服薬しているお薬の説明書類を閉じ職員が共有・把握できるようにしている。また主治医往診時に薬の変更があれば管理者が説明を受け、職員に説明をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	綿密なモニタリングの元、自立支援をしっかりと行い役割分担表を作成している。個々の得意なことができるよう、1日1回皆さんが笑って頂けることを目標に努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩は毎日全員が参加され日課としている。買物・外出は個人で対応している。	周辺道路の往来の混雑時を避けて、近隣周辺を散歩している。直近では車で山田池公園に出かけてコスモス等の花見に出かけている。事業所の庭にある樹木(紅葉・桜・ゆず)や花を愛でて気分転換や日光浴を行っている。コロナ禍以前は電車で京都に出かけたり、車で遠出の外出を行っていたが現在は中止している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族様やご本人様の希望がある方、又は使う機会が無くても少しのお金と財布を持つことで安心される方にはご自分で管理していただくよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人様が電話を掛けたいと要望があれば電話の掛け方を教えたり、また取り次ぐなどの支援を行っている。ご家族様・親族様と手紙のやり取りを希望される方にはその都度支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間兼食堂はH22・8月移設後以前より広く、居心地良く過ごせるようソファーや長いすを設置したり、季節感を出す為に季節に合った壁画作りを利用者様と一緒に作成している。	リビング兼食堂に空気清浄器を設置し、換気・消毒をこまめに行っている。リビング壁面に職員と一緒に作った季節の飾り物や書初めの習字・お便り(年3回発行)を飾り和やかな雰囲気を出している。リビングのニヶ所にソファを配置して個別で寛げる空間の配慮や、トイレ・浴室は分かりやすい表示を施している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにソファーを置くことにより、気の合う利用者様同士が談話したりできるスペースを設けている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者様の使い慣れた物・家具を持ってきて頂いたり、ご自分で作った作品を飾られたり、居心地良く安心して暮らして頂けるよう工夫している。	利用者がこれまで慣れ親しんだ調度品(テレビ・鏡台)や家族写真を持ち込み、その人らしい居室となっている。カーテン・ナースコール・エアコン・タンスは備え付けで、地震対策として家具は固定し安全面に配慮している。又居室内の動線確保にも留意して安心して過ごせるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ふらつきのある方には居室適所に手すりを付けたたり、危険の無いように1人1人の状態に合わせて、居室のタンス等の位置を考え工夫している。		